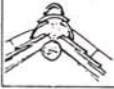


許子東氏講演（1991.6.22）



「“新時期”文学の歴史的意味」に寄せて



加藤三由紀

◆ “新時期文学”——すでに色褪せたと思われたこの言葉、実はエネルギーあふれる魅力にあふれていたのだと今では思う。脱皮、模索、実験、冒険、新時期文学は確かに創造力に満ち満ちていた。もちろん、“新時期”を過去形で語れるものかどうかは今後の動きを見ていかなければならないが、六・四事件を境に、だれもがこれまで存在しなかった新しいものの創造に参画し得た状況は閉じられてしまった。

今年三月から中国当代文学研究会では、七〇年代末から八〇年代末までの新時期文学の歩みをじっくりたどってみようと年次計画らしきものを立て、例会を重ねている。そこで、在京有志の招きで来日されることになった許子東氏に、八九年までの十年間の文学状況をどうとらえるかを中心に、あわせて“流亡（Expatriate）文学”の現状についても語っていただきたいとお願いしたところ、“新時期文学”の歴史的意味（“新時期文学”的歴史意義）と題する講演をご用意いただいた。許氏は1954年生まれ、すでに『郁達夫新論』（1984、浙江文芸出版社）『当代文学印象』（1987、上海三聯書店）の著書があり、現在UCLAで博士論文執筆中。二度目の来日。名刺には華東師範大学中国語言文学系副教授とあるが、中国にはもう三年も帰っていないという。様々な思いを抱いておられたと思うが、こちらに伝わってきたのは、あふれんばかりの才気。モノグラフィ的研究に終始しがちな我々にとっては、新時期文学十年というだけでも十分大きなテーマだが、氏はそれを文革までの現代・当代文学VS新時期文学というさらに壮大なパノラマに演出して見せてくれた。氏の茶目っ気たっぷりの語りの魅力は再現すべくもない。以下、私的なメモに基づいてその概要を記す。

.....

文学を“社会意義結構”との関係でとらえると、新時期以前の現代・当代文学と新時期文学には、それぞれ次のような歴史的意味があった。

新時期以前の現代・当代文学

①伝統的“社会意義結構”を破壊したが、宗教と法律（両者は中国では一体

となっている)という二つのレベルで”社会意義結構”の創造に直接かかわるという志向は伝統的な儒家と同じ。(五四時期の文学)

②中国共産党政権の新しい”社会意義結構”の創造に参加。1954年の憲法成立以前からとうに人々は共産党を信じていた。多くの作家は無意識に文学的言語で歴史を語り、この新しい構造を受け入れる物語をあんだ。(三〇年代左翼文学)

③新しい”社会意義結構”が固まると、作家はその創造者から解釈者になった。物語を信じることは体制を信じることであるから、その物語の複製に携わる作家の地位は高い。中国の作家は不幸であるが、その地位を享受することができるのも確かだ。体制の安定を支える物語は書き替えられない。だから、現代文学史は書き替えられず、新版の辞海も魯迅、郭沫若、茅盾の項は改められなかった。(1942年以降、特に1950年代以降)

新時期文学

①今の”社会意義結構”への破壊、反逆。1:スローガンの転換(劉心武「子供を救え」、劉賓雁「第二の忠誠」、白樺「祖国よ、私はあなたを愛す、だが、だれが私を愛してくれるのか」など) 2:歴史の書き替え(莫言『紅高粱』、喬良『靈旗』、張正隆『血紅雪白』、王安憶『小鮑莊』、格非『大年』など) 3:言葉の転覆(馬原の語りのトリック、残雪の毛沢東語録の言葉―”毛語”―の復唱、王朔の”毛語”の反語的用法)

②何らかの新しい”社会意義結構”の創造には無力。これまで現”社会意義結構”創造に携わってきたので、それへの反逆も補修の域を出ない。破壊の力を持ち得る作家たち(①の2、3)は、”社会意義結構”創造など目指していない。また、かつての左聯作家たちのように武器にし得る外来思想もない。中国にいると魅力的な思想も、海外に出てみるとそれが抱えている問題が見えてくるからだ。これは海外で活動している作家の悩みでもある。

新時期以前の文学から新時期文学へ

新時期以前:一人一人の人民は一人の人民をも代表せず、たった一人の毛沢東が全中国を代表するという「虚」(”社会意義結構”)を物語る文学。

新時期:これまでの物語が「虚」であること、圧倒的多数の人民の頂点に毛沢東が立つという「実」を語る文学。

◆ 例会メンバーのほか、伊藤虎丸氏、代田智明氏、宮尾正樹氏、そして東京女子大学から数名の学生さんが参加、駒沢大学の会議室が程よくまった。間にケーキとコーヒー、ブレイクタイムをはさんで質問、交流。

海外での文学運動、たとえば、《今天》のような雑誌がどのように読者を獲得し得るのかとの質問に、中国国内での読者獲得を目標にしているのだが、国内に持ち込むには技術的な問題があるとの答え。今、海外在住の作家が直面している問題は、中国に帰るかどうか、政治亡命を申請するかどうか、外国語を学かどうかの三点だが、故国での言葉はどんどん変わっていくのだから、作家にとって最も切実な悩みは言葉の問題だという。関連して、国内に残っている作家についても語ってくれた——しばらく筆を執らなかつた作家たちも、生活の問題があるので書かざるを得なくなっている。だが、実験的な試みは中断され、直接政治にかかわらない、多くの人々に好まれるもの、たとえば、『渴望』（連続テレビドラマ）は北京の四合院の人間関係を扱っているし、上海の作家たちは『上海人的故事』を編んでいる——。

◆ 許氏のいう文学とは、映画、演劇、劇画などサブカルチャーを含む広い概念らしい。だとすれば、人民解放軍は必ず勝利し、中国共産党は人民を必ず幸福にする——こんなパターンに収まってしまう文学作品が大量にあるのだろう。解放軍は圧倒的に強いのになぜ日本軍をさっさとやっつけないのかと、少年時代に映画を見るたび不思議に思ったと許氏という。そんな体験を紹介しながらまとめられた新時期以前の文学作品の特徴に説得力がないわけではない。また、新時期文学はこれまでの物語が騙りであったことを語る（許氏の論はこう敷衍してもよからう）というのも、新時期文学を魅力的に見せてくれるまとめである。文学者の社会的地位と為政者にとっての文学の効用との関係もおもしろい指摘だ。

実に明快だが、近代以降の中国文学の猥としたイメージとどうもそぐわない。様々な作家、作品を思い浮べてみても、この枠組みに納めて座りのよいものがないのである。時間的な制約のため、読書（受容）量の圧倒的な差（サブカルチャーとなるとこちらはゼロに等しい）を補っていただく余裕がなかったのが残念である。

だが、この枠組みがこちらの胸に響いてこないより大きな理由は、このように明快に切りこむことで許氏には見えてくるものが、私には見えていないということだろう。『思春期を』毛語』まっさかりの七〇年代におくり、八〇年代には文学（研究）者として地位を得た氏にとって、新時期前後の文学状況をこうまとめるのは痛みを伴った仕事であつたに違いない。氏のユーモアは、その痛みを包むオブラートだったのかもしれない。